

新書紹介

ネットワーキング

J・リップナック・J・スタンブス著

社会開発統計研究所訳

プレジデント社 三四〇頁 一、九〇〇円

本書は、その題名から、物理的ネットワーキング・システムについて述べているように思われるが、実はここでいうネットワーキングとは、人間的なつながり一人と人の関わり、結びつきである。アメリカ合衆国における多種多様な自主活動グループを調査し、その内容を分析し、七つのカテゴリー（治療・共有・資源利用・価値・学習・成長・進化）に分類することによって、それぞれのネットワークの特徴を明確化している。

ネットワークの定義として、著者は、それに参加する人々については「さまざまな問題を提起し、その解決策を主として既存の体制の外に求めるような人々」とし、ネットワークそのものについては、既存の社会組織とは異なっているが「ある種の組織であり」「ただこの組織は官僚組織や階層組織とは明確に異なる」ものとしている。その柔軟で自由に変化し得る性質として、著者は一〇の側面をあげているが、その中でも、ネットワークの成員がそれぞれのあらゆる活動部分において重要性を認識し、また「価値観」を共有して結ばれているということ、そして他人に依存しない、あくまで自律的な参加者としてと同時に、内部では一つの「部分」として機能する人々の集まりであると述べている点は、その特徴をよく表わしている。こうした性質から、一つの組織論でネットワークをとらえてみて

も、明らかに既存の社会組織のワクからはみ出した、画期的な「ある組織」であるという認識を得るであろう。

第一章の「もう一つのアメリカ」の概念について「ある場所をいうのではなく、心の状態をさす。」と著者が述べていることについては、それを生み出すためのネットワークの拡大を考察してみれば、かなり具体的にイメージを描き出すことができ。一般市民が日常生活の中で抱くさまざまな疑問や問題意識を、そのまま眠らせずさらに拡大し、目的を明確にし、より良い方向へ進む努力をするという一連の行動は、市民運動等としての位置づけの前に、人間としてとても素朴な行動、非常に人間的な行為であるといえよう。それゆえ、この人々は現状の社会政治体制のワクを超え、あるいはワクにとらわれない発想を持つことによって、新しい解決策を生み出すことが可能となる。この活動のエネルギーとなるものがネットワークであり、本書で述べられているように自由で適応力に富んだものなのである。従って、ネットワークの拡大はより人間的な輪の拡大でもある。「もう一つのアメリカ」の発見とは、こうした数多くのネットワークのつながりによって生じる、表面に出ない結びつきの集合体としてのアメリカを見出すことにほかならない。そしてそれはもちろん、既存の公式の国家としてのアメリカと対比させている。本書において、著者はさまざまな個所でこの「もう一つのアメリカ」としての示唆を与えているわけであるが、なによりも、七つのカテゴリーに分類されたさまざまなネットワークの具体例を読み進めていくことが、事実としての新しい兆候を認識できる一番の近道かも知れない。

最終章において「ネットワークづくりの手法」として、著者自身の体験が述べられている。本書をまとめあげるために著者がとった行動自体そのものも、人とのつながりと、そこから得た情報から成立している。ネットワークづくりに関しては、は敢えて身構える必要はなく、ごく自然に行うべきであると

し、「望む人は誰でもネットワークカーになれる。ネットワークづくりは資格や世間の評判とは無関係である。それは、どんな目的をもち、困難にもめげずにやるかにかかっている。」と述べている。今後自主活動を行っていく意思のある人々にとつては大いに参考になるであろう。ネットワークそのものはいわば非公式な「組織」であり、現状では既存の諸組織への影響、発展段階における社会現象としての体系づけ等、まだ明確に位置づける段階に達していない部分もあるが、極めて自然なかたちでこうした新しいうねりが生じている事実を認識できる本書は、一つの衝撃でもある。

また、今後高度情報化社会へと突入していく中で、物理的な情報手段の発達により、これらのネットワークがどんな変容をなしていくかという興味は「情報」伝達の観点から、大きなものとして浮かび上がってくる。

大都市計画局総務課庶務係

藤又 衛